

戸がこれだけあるんだから、雑水の出るやうな井戸は、大分殖えたことだらうと思はれる。一體江戸の鑿井の認められたのは、享保以來のことでありして、それはいづれも皆掘抜井戸で、前の掘兼式とは違つた型のものであります。

掘抜井戸が珍らしい

掘抜井戸は上方には古くからあつたやうであります。江戸でも享保以前から掘抜があつたことと思はれる。現に『續五元集』の中に、元祿十四年と書添へてある附合があります。

涼風におもふ矢つほや臆

手拭を著てしさる掘貫

といふのですが、これよりもまだ前の、延寶版の『吉原大雑書』に、或遊女を評して『此人に町内のほりぬき井戸程ふかき人有よし』と書いてあるが、それは深

いといふのを形容しただけであつて、この當時の新吉原には掘抜井戸は無く、水道尻といふところはありましたが、水道も新吉原には無いので、元吉原の方には水道が引込んでありました。水道尻といふのは、水道の一番おしまひのことで、この名だけが傳はつて、新吉原に水道尻といふところがありません。が、實際の水道は無かつた。『洞房古鑑』を見ますと、新吉原の掘井戸の水といふものは、皆いけない水であつて、砂利場竹門の脇にある井戸の水がよいので、日々そこから汲ませて、水錢として、その井戸の持主に、月々集め錢をして贈つて居つた。それが享保年間になつて、揚屋町の尾張屋清十郎のところではじめて井戸を掘つた。さうするといふ、按配に水が大變湧出した。この湧出する水があまり分量が多く、且いゝ水であつたので、見物が集るほどであつた。それから廓のうちの町々でも、井戸を掘らせるものがあつて、竹門から汲ませることはやめになつた。その頃江戸の町々の方でも、所々へ井戸を掘らせてゐ

掘抜井戸が珍らしい

だが、前の尾張屋清十郎は、どうぞいゝ水が得られるやうにいつて箕輪の秋葉権現に祈願した、その御利益でいゝ水が出たんだといつて、御禮の爲に秋葉権現の社地へ井戸を一つ掘つて居ります。そこでこの洞房古鑑には――後には掘抜井戸といつたものですが――『モミヌキ井戸』と書いてある。後の掘り方とどう違ふのか知れませんが、同じではなかつたらうと思はれます。

吉原の井戸は揚屋町の尾張屋清十郎の井戸がはじまりで、それは享保何年であつたかわかりませんが、享保十三年の物揃を見ますと、『近年よく成た物、里の水と葛野九郎兵衛』とある。それから里の水がよくなつたといふほどですから、大分モミヌキ井戸が澤山出来たといふことは、『洞房古鑑』の文句と引合して考へられることとありますが、有合せた享保十二年の細見を見ますと、角町に、『井、新井、新井』と三つ井戸が書いてある。京町一丁目のところには『井、新井』と二つある。京町二丁目にも『新井』とあつて、『巳五月以來』と書いて

ある。巳の五月といふのは、享保十年のこととあります。ちよつとこゝで見ただけでも、新しく掘つた井戸が四つほどある。吉原に井戸のだんくゝ殖えて行く様子は、この十二年の細見だけ見ても考へられる。『巳五月以來』とあるのから考へて見ると、新井とある井も、その前からある井戸なのが知れます。尾張屋のはじめての井戸といふのも、當然享保十年以前であることが知れます。

五郎右衛門の發明

そこで江戸の掘抜井戸の發明者は誰だといふと、神田の白銀町に五郎右衛門といふ代々の井戸掘がありました。その五郎右衛門が享保八年に、馬場先門内の竹姫様の御用邸内へ、新しく井戸を掘つた。この竹姫様といふのは、綱吉將軍の養女で、享保十四年六月に薩摩の嶋津へ御輿入なされた御方です。その御用邸へ井戸を掘ります時に、掘抜ではない、中水の約束でありましたけれども

なか／＼水が出ない、それから五郎右衛門は親父に相談して見た。どうしても水が出ないが、何かうまい方法は無からうか、といつて相談した。すると親父がいふのに、掘つて行つた底がどんな土であるか、その土質によつて竹の管を深くさし込んで見たら、或は水脈へ届くかも知れない、さうして見るがいゝ、といふことであつた。そこで五郎右衛門は、大きな竹の節を抜いて、さうして今まで掘つて来た井戸へ下して、どん／＼打込んだ。十間ばかり打込んだと思ふと、いゝ水が出て来た。これが江戸で掘抜の方法に氣がついた最初である、といふことになつて居ります。それから三年ほどの間に、五郎右衛門は二十ほどの井戸を掘つた。當時の井戸は八兩づつの約束だつたが、掘抜の場合には十七兩貫ふことにした。これからだん／＼掘抜井戸といふものが流行つて来たのですが、これは本當の掘抜井戸ではありません。が、享保八年に五郎右衛門が井戸の新しい掘方を工夫したといふことは、江戸の鑿井の上に大きな影響を與

へたことだつたのであります。

その五郎右衛門が、かういふことを云つてゐる。凡て掘抜井戸を拵へるには五間ほど掘つて行くと、底には青へナといふ土がある。その青へナを竹で突通して行くと、その下に岩がある。この岩に突當れば手筈がある。その手筈があつた時に、さし込んで行つた竹を抜取れば、いゝ水が得られる。けれどもこれはまだ中水の井戸であつて、掘抜といふことになる、下の岩を突通してからでないといけない。岩を突通してしまへば、本當のいゝ水が出て来るのだ。―かういふことをいつてゐる。けれどもなか／＼竹を突通しただけで、岩が碎ける筈は無い。その竹で青へナを突破るといふ遣方は、今日でもやつて居ります。打込といふやつで、今は竹ぢやありません、大きな鐵の棒の先の尖つたやつ―大きな錐のやうなものです。それを上から下して打込むので、それは大きな鐵の錐ですから、これなら岩も碎けるでせうが、竹ではとても碎けない。

鐵と竹とは違ひますが、とにかく上から打込んで行くといふ掘り方、これは五郎右衛門が始めたといふのが、よさうであります。

五郎右衛門と同時に南茅場町に八兵衛といふものがありました、これも五郎右衛門と同じ方法で掘抜を拵へた。それですから、掘抜井戸が殖えて参りまして、享保十九年の頃には本所の方まで掘抜井戸が出来て、水に不自由しないやうになつたといふことです。『洞房古鑑』にある『モミヌキ井戸』といふのも、五郎右衛門の竹を中へ打込むやつではないかと思ひます。後のやうに足場をかけて、萬力で大かな鐵錐を上下するのではないから、『モミヌキ』といふ言葉が出たんぢやないかと思ふ。

幕府は享保十八年十二月九日に布令を出して、井戸掘代金は年賦請負にしていゝ、といつて願出たものがあるから、望の者はそれと相談するがいゝ、といふ御觸を出してゐる。これは鑿井の奨勵で、當時水道を減しても居りますし、

防火制度を拵へても居りますから、旁々以て井戸を多く作る心組のあつたことが見受けられます。

金澤と内田屋の井戸

さういふわけで、享保度には井戸がだん／＼殖えて参りましたけれども、當代には井戸屋といふものは無かつたやうです。五郎右衛門の家は數代つゞいた井戸掘だといひますから、享保以前からあつたに違ひありませんが、享保度までの書類には、井戸掘といふ名稱はありません。土方の一部の作業として居つたのだらうと思はれます。馬場文耕が寶曆六年に書いた『寶内密が祕とつ』の中に、次のやうなことがあります。

上野廣小路金澤丹後願に付掘井戸被仰付事

江戸金吹町金澤丹後と言菓子屋、近年殊外繁昌して、日本橋にも大きな

金澤と内田屋の井戸

見世みせを持もち、上野うへの廣小路ひろこうぢにも出見でみせ有あり、何なにも女をんなの兄弟きょうだいにて聳むこを取とり其家そのいへをわかつ、皆々みな商賣しょうばい繁榮はんえいしてやん事ことなき有様ありさま也、上野うへの廣小路ひろこうぢ金澤かなざは、菓子餅かしもち等を製せいするに、上野うへの邊へんは水みづ甚はな不自由ふじゆう也、此この近邊きんぺん御徒おかち組屋かちぐみ敷神田しきかんだ、敷馬組かづまくみ三枚橋まいばしきわ御徒おかちの地ぢ借本かりほん阿彌あみ何某なにがしの持井戸もちいど、近邊きんぺんにて名水めいすゐと唱となへて人々ひとびとこれを貫ぬひ汲くみてつかふ也、掘貫井ほりぬきにて其そのわき出いる事こと泉いづみの如ごとく也、依これに之よりおしまず人ひとに汲くみせたり、諸人しよにん相應さうおうに謝禮しゃれいして是これを汲くみけり、彼かれ金澤かなざは丹後方たんとごよりも毎日まいにち日本にほん阿彌あみ井戸いどより大勢おほせにて水みづを汲くみせ、饅頭餅菓子まんぢうもちがし等を製せいする故ゆゑに、夥おびた敷ぶ水みづも入用いふようにて皆其井戸みなそのいどより汲取くみとり、されば五節句せつく其外そのほか寒暑かんしよの附届つけと莫大まくだにして宜敷禮よろしくれいを盡つくしけるに、如何いかしたりけん本阿彌ほんあみと金澤かなざは其間そのあひだくわくしつと成なりて、金澤かなざはが水汲みづくみを門もんを留とめて不いれず、水みづ一滴てきも吳くれず、金澤かなざは大きおほきに難義なんぎして色々いろく佗わけれ共ども得心とくしんせず、依これに之より丹後方たんとごにて何なにとぞして手前井戸てまへいどを掘ほりたしと願ねがへ共ども、手前土てまへとち地ぢもなく私わたくしに致方いたしかたもなければ、色々いろく公邊こうへんへ手入ていれをして、小田原町大和屋助おだはらちやまとやすけ

五郎ごろうは其次娘そのつぎむすめを子細さいさい有ありて堀田相模守方ほつたさかのみかたへ奉公ほうこうに出だし置おけば、此縁このえんを以もつて内ない證しょうより金澤井戸かなざはいどを御免被下候様ごめんくだされさふらふやうにといろく申上まをしあげたり、町奉行様まちぶぎやうさまも御聞おきき合有あはせしかども、其例そのれいなき處ところ故願ごらん叶なふ共見ともみへざりけるに、今度こんど仁王門にわうもん出來ゆつに付願つぎねがひを出だし、若出火之節もししゆつわのせつ仁王門御防にわうもんおんぶせぎの水御用心みづごようじんの爲ためにも御座候間ござさふらふあひだ、井戸いど御免可被下ごめんくだされと手前入用てまへいふようを以もつて掘ほらせ度候之由たくさふらふのよしを願置ねがひおきけり、物ものをも願ねがやうによつて、成ながたき事ことをも成就じやうじゆする事ことぞかし、立處たちどころに願ねがひとほりあふせつけられそじ、即時みちに道みち奉行ぶぎやう小長谷喜太郎見分相濟せうけんぶんあひすみ、五月七日願むいごにちのねがひ之通のとほり申付まをしつけられたり、其翌そのよく八日かより數百人すうひやくにんをかけて井戸いどを掘ほらせんとする處ところ、五月八日むいごにちは上野うへの嚴有院げんいういん様御靈さまおたま屋やへ、公方くほう様御成さまおなりに付つき、其翌そのよく九日かより井戸いど掘大勢ほりおほせ懸かり丹後見たんとごみせ先前さきまへへ井戸いど普請ふしん、今いまは思おもふまゝに出來しゆつたせりとかや、ことしの物ものがたりの花はなともなれば爰こゝにしるすのみ。

享保度きやうぼどに隨分ずぶん澤山たくさん井戸いどが出來できたやうですが、まだなかく足たりない『寶丙密ほうへいみつ

か秘とつ』を書いたのは、寶曆六年のことでありすが、この頃でも井戸が少
いから貫ひ水をする。貫ひ水の爲に多分の禮をしたらしいことが書いてありま
す。この井戸は明治三十六年まであつた井戸ですが、其後二十餘年に筋違外の
内田屋の井戸が出来た。今の松住町のところで、これも電車開通の爲に、金澤
の井戸と共に潰してしまひました。内田屋の井戸に就ては、無名隨筆の中に次
のやうなことが書いてあります。

内田屋の井戸

菅貞明翁の筆記に、昌平橋外内田屋本家の井戸は寛政九巳年新規掘立し
のにて、至て六ヶ敷井なりしが入用多くかけ、人々精力を盡して、漸く成就
せしと也、右は本所菊川町の井戸屋傳九郎(でく市と云、傳九郎と云事也)
請負にて、掘方は同所淺次郎とて井戸掘の方にては名の聞へしもの也、此
井戸最初は金高四百兩の積りにて請負取掛りし所、思の外水脈遠くして悪

水のみ涌出し故、毎日夥しき人数をかけるの仕方を致して、數月
の間掘立けれども埒明ず、追々諸入用多く掛り、後には人足其外への諸拂
も差支へける故、請負人難儀致し、所詮右之金高にては此井戸出来なり難
きよし、内田屋へ相談しけるに、主人も眉をひそめ、此事いかゞして宜し
からんと一同評議に及びし所、支配人何がし申には、四百兩之金子無益に
相成り、右之始末にて候へば、此上何程入用掛り候とも成就せん事覺束な
く候、大金を費し心勞致し候義然るべからず候に付、是限り相止申べ
しと云、次の番頭某甲は、是迄仕掛り候事を此まゝ打捨候事殘念之義に
は候はずや、なすべき丈の手段を盡して、夫にても成就せせんば是非に及
ばず、金子のかゝるを厭ひて中途にして止たりといはれんは家名の恥辱と
も相成べし、多分の入用に候とも職方はじめ人足どもの潤ひにも相成候得
ば、是施しの筋合にて無益の損失とは申すべからず、猶又取かゝらせ可然

やといひける、評議是に一決して再度掘かゝり候に付、右番頭は大相模の不動尊に願掛に罷越、請負人傳九郎は成田の不動尊え参り、斷食いたして心願をこめ、跡は掘方淺次郎引受、是も龜戸の妙義権現を祈念して出精いたし掘立候處、取掛りしより六日目に至りて出家一人來りしが、井戸をつくぐと見て、此掘方にては中々成就致間敷と云、淺次郎是を聞て、然らばいかゞいたして宜しく候や、願はくば教へ給へと云、彼僧申は、長き棒を拵へ其先へあほりといふものを付け、高き屋ぐらの上より突立、井の底なる砂を段々かへ出すときは成就すると疑ひなしと教ゆ、淺次郎大に喜び、傳九郎留守中なれども右之道具を拵へ、あほりは桶にして厚き木を以て造り、桶底に別して厚き木を用ゐ、是を以て井の底をつき砂をかへ出し試みるに、暫時の間に桶損して長くたもちがたかりしかば、是にては事行かずとて、夫より鍛冶屋へ誂へて鐵にて右之道具をこしらへ、是を用ゐて

試みるに至極よろしく有ける故、段々砂をかへ出して事故なく成就なしけるより、主人始一同に悦びて、人の情力により末代迄の寶を得たりとて、右之番頭を始め井戸方のもの共を厚く賞し賑やかに祝をなしける、仕上げ迄之金高全く七百五十兩掛りしといふ、初めの内は此井戸、水を吹上げて、内田屋の方は地面高き故大道へ流れ出しかば、溝を掘て川へ落せしが、後には水勢もよわくなりて始の如くには吹上ざる也、右淺次郎、此時の事を繪にかゝせて妙義の社へ奉納なしける、其額今以て有之といへり。これは寛政九年に掘つた井戸でありまして、本所菊川町の井戸屋傳九郎が請負つて掘つた。四百兩の約束であつたのが七百五十兩かゝつた、と書いてある。この位金をかけた井戸は、江戸にも少かつたらしい。内田屋でも神信心をしていゝ水が出るやうに祈つたといふことも書いてある。この時分は掘り方も大分變つて居りますけれども、それでもいゝ水を得ることはなかく、容易でない。

又井戸掘に就てもいろく工夫したことは、この本文を見ればよくわかりますが、享保から寶曆、寶曆から寛政と、多くの年數を経ても、鑿井の困難だったことは、この記事によつて十分窺ひ得ると思ひます、内田屋の井戸に就ては、『明寛秘録』の寛政二年のところに、夏から秋までかゝつて掘つた。いゝ水が出たから、誰も彼もこの水を汲むやうにといふので、皆にこれを汲ました、自體こゝは掘抜にはならぬ場所であつたのに、入用構はず手間取つて、遂に掘抜にしていゝ水を得たといふことが書いてあります。無名隨筆の方と附合すと、寛政九年と寛政二年になつてゐて、何方がいゝかわかりませんが、内田屋が大變金をかけて井戸を掘つたことは慥であります。内田屋のみならず、商家で井戸を拵へる時は、いつも店先へ掘る。これは自分の家だけで使はずに、人にも使はせる意味からかういふ仕癖がついたので、いゝ水が少いから、いゝ井戸を誰にも使はせるといふことは、大變な公益でありました爲に、わざく店先へ掘らせたのであります。

天明以來の大坂掘

かういふ風にだんく年を経るに従つて、井戸を掘ることが盛になつて來たのであります。松浦靜山侯の『甲子夜話』を見ますと、自分の幼少の頃には掘抜井戸が少かつたが、中年より少し前の頃から掘抜がはじまり、今では江戸中一般のことになつて、どこにも掘抜の無いところはないといふことを書いて居られます。靜山侯は天保二年六月に八十二で卒去されたお方ですから、幼年の頃といふのは安永天明、中年といへば寛政頃になりませう。さうすると享保がなかく鑿井の盛な時だつたやうですが、又寛政度になつて一盛り鑿井が盛になつたことが知れます。

文化十一年に書いた『塵塚談』を見ますと、かういふことが書いてある。掘抜

井戸といふものは先年からあつたが、武家には一向に無い。掘抜井戸を掘るには二百兩もかゝることであるから、大きな商人でもなければ掘らせることが出来ない。だから彼處に一つ、こゝに一つといふほどで、やう／＼と探しあてる位のものであつた。ところが二三十年以前から大阪の井戸掘が来て、『あふり』とかいふ道具で無造作に井戸を掘ることをおぼえてから、掘抜井戸入用といふものが大變少くなつてゐる。自分が知つてゐる極樂水——これは小石川です——豆腐屋では、井戸側とも三兩二分で出来た。其向うに『みつまた』といふ湯屋があつて、これは最初に掘らせたから二十兩ほどかゝつた。そのせゐであるかも知れないが、近邊で一番いゝ水になつてゐる。近頃は江戸中で掘抜井戸が多くなつて、一町内に三箇所も四箇所もあるやうになつたといふことが書いてある。二百兩もかかるといふが爲に武家には無い、大商人でなければ無い、といふのは如何にも情無い話で、武家の資力の乏しかつたこともよくわかります。

寛政頃の大名のことを、集めて書きました『近世諸家美談』といふものの中に、『大名に有てよきものは、よき家老、駿馬、渡り小姓、掘ぬき井戸、達者なる祐筆』といふことがあります。昔は二百兩も入用がかゝる爲に、欲しいものはあつても、大名でも掘抜井戸を自由に掘らせることは出来ないから、大きな屋敷でも僅に三箇所、四箇所といふほどしかない。竹姫様御入興の時、薩州では水道を邸内に引込むことを成婚の條件にして、幕府の許可を得てゐる、といふやうなこともあつた。ところが二三十年と申せば天明度のことですが、大阪から井戸掘が来て以來、大變安くなつた。来た當座に二十兩ほどであつたものが、暫くたつと井戸側とも三兩二分で出来るといふ風になつた。それはどういふことかといふと、『あふり』といふ道具を使ふやうになつたからで、『あふり』のことは内田屋の話の中にも書いてあります。この掘り方は、俗に『上方ぼり』といつて居りましたが、これがはじまつた頃は、なか／＼井戸が多く出来た。

一九の黄表紙にも『時花塹拔井』(寛政九年版)といふのが出来て居ります。
『續青本年表』には、江戸に掘抜は無かつたが、天明の末に、この職人が来て掘りはじめた、と書いてある。一體機械を使つて掘抜をするといふことは、幕府の御大工棟梁の溝口内匠の考案だといつて居りますが、大阪から井戸掘が来てはじめたのだとも云はれて居ります。そこで『あふり』といふのは、どういふものであるかと申しますと、その模様は文政七年版の『如月稻荷祭』の本文に委しく書いてあります。

掘抜をほりますには最初ワクをいれまして、下へ掘さがります、そのときは、兎角中水が一夜のうちにたまります、それゆへに朝々玄蕃で水をかへまする、そのとき職人のうちで長ましたるが、綱楫と申するをいたします、大勢に綱をひかせまして、そのもとをおさへおりまして、水をかい出します、下にも人がはるりおりまして水を玄蕃へ汲いれます、右の玄蕃

を下へ遣しますときに、マアイルは桶よと呼まして、下で玄蕃へ水をいつぱい入ますと、引人のほうへむかひまして、ひいたアリしよと云ひます、まづそれはさて置、掘抜と申するものは一ばんしまひに錐を入まして岩を抜まする、左様にいたしますと、水をふきだします。

この掘り方は私の幼年の頃まであつたので、私もよくおぼえて居ります。この掘り方によつて井戸を掘つた様子は、『我衣』の文化十二年の條にも出て居ります。松平讚岐守殿の屋敷——これは讚州高松の殿様で、今の松平頼壽伯の御家ですが、この屋敷は御茶ノ水の上の方にありました。そこへ掘抜井戸を掘つて、愈々今日錐を入れて水が吹出すといふことになつた時、その水筋へ突當るといふと、恐ろしい水勢で、大そう高く湧出した。皆がびつくりする程だつたと書いてあります。この錐を入れる爲に足場を拵へるので、寛政十一年版の『仲街艶談』といふ洒落本に、『其高慢のはなは掘抜の足代よりも高く』と書いて

ある。これは随分高く拵へるもので、その高いところまで萬力で引上げて置いて、下へドンと錐を下す。又引上げてはドンと下す。この様を書いたものは文化十二年版の『堀内奇談馬方蕎麥』に、

おりよをほりぬきのやりだとおもふさうだ、なせぢやへ、『あげたりさげたり、

と書いてあります。これは足代を高く拵へて萬力で、鐵の太い錐を引上げてはドンと落とし、又引上げてはドンと落します。こんなことによつて、その狀況はよく見えます。

大坂ぼりの入つて来たのは天明度のこと、それがひろがつて寛政度には掘抜井戸が澤山になつた。享和元年に書いた『黒甜鎖語』の中に、近頃江戸では掘抜井戸といふものを拵へはじめた。先頃まで千兩で請負つたといひ、五百兩でも出ると聞いてゐるが、寛政八年の夏、佐竹の三味線堀の屋敷で掘抜井戸を

拵へたら百兩で出来た、淺草の中屋敷に二ところ掘つたのは、五十兩づつで出来た、これまで秋田から江戸へ出て勤番をつとめる藩中の者は、どうも腫満や痲疾のやうな病氣をおこしたが、それは水の悪い爲におこる病氣と見えて、掘抜井戸が出来てから、それらの病が無くなつた、と書いてある。けれども殿様に差上げるのは、上野の元光院の水を汲んで来る。この元光院から汲んで来る水と今度の掘抜の水とを秤にかけて較べて見たところが、掘抜の方は三島茶碗に一杯で六分軽かつた、それほど今度の掘抜の方がいゝ水だといつてゐる。この殿様の飲料水といふことに就ては、掘抜がだん／＼出来るやうになつても、なかく／＼吟味されたものでありまして、お茶の水——此の名稱の起りは、聖堂の西に當つて名水がありました、將軍家のお茶の水に汲用されたからであります、是は慶長九年に元神田から此處へ轉じてまゐりました高林寺の境内の井戸で、此の寺は明暦三年の火事後は駒込へ移りました、渠の名井は萬治の神田川

堀割の時には、水際へ僅に形跡を残しましたが、享保の河身改修で全く水底に没してしまいました、其の後に昌平橋外の加賀原にあつた加賀の井、又本願寺の井とも申しました。是は慶長年間に本願寺があつた處だと云ひます、即ち神田の旅籠町三丁目の汁粉屋の裏に、御膳水といふのがあつて、これが江戸中で一番いゝ水といふことであつた。維新前は將軍の飲料水は、この井戸から汲んでゐた。その傍に茗荷屋といふ家があつて、阿部様の小買物をするのを内職にしてゐましたが、本職はその井戸の番をするので、それで生活を立てゝゐたのですと、『神田の傳説』にあります。

抹茶煎茶の流行

水の吟味がだんく委しくなり、水道よりいゝ水が鑿井から出て來るので、それを吟味して將軍のみならず諸大名もそれを擇む。又一般から見ましても

『寛天見聞記』にある通り、寛政度には川上不自によつて抹茶が擴まりましたが、更に享和頃から煎茶が大變流行つて參りまして、お客を呼んでお茶を幾通りも出す。さうしてそのお茶の銘と水の出所——これは王川、これは隅田川、これは何處の井戸の水、といふやうなことを云ひ當てるのを賞美した。やはり享和時分のことですが、八百善へ茶漬を食ひに行つたら、一日待たせられた。茶漬の茶を拵へる爲に、多摩川まで水を汲みにやつたので、それで手間取つたのだといふやうな話もある。さういふ風に水の吟味といふことが盛になつて來ました。その時は、又堀賃が益々安くなつて參りましたので、化政度になつては愈々堀抜井戸が多くなつて來た。享保度、寛政度、化政度と幾度かに區切つては、その度毎に井戸の數が殖えて參りましたが、さりながら江戸の土地柄として、水が十分とは云へません。水道は無論神田、玉川の兩上水があるのですが、『我衣』の文化十四年五月の條を見ると、十五日頃からひどい暑さになつて

来て、すつかり旱模様になつた、雨が一粒も降らず、日にく照りまさつて参りましたから、その月の二十三四日の頃には、方々で水ぎれになつた。下町邊では一荷百文から百十二文位で水を買ふやうになつた、この水屋といふのは、重に下町に居りまして、天秤棒の兩端へ細長い桶をつけて、それを荷つて、一荷いくらといふわけでそれを賣る。町の小娘などは門へ出て、『水屋さん一杯入れて下さい』といつて呼び込んだものです。さういふ風は明治十何年頃までも續いて居つて、一荷一錢でしたか、五厘でしたか、中には片荷でいゝといつて桶一つだけ入れて貰ふ者もあつたやうであります。水を賣るといふことは、他の地方には珍しいことですが、江戸では古くからあつたことゝ見えて、享保二十年版の『渡世身持談義』に、『江戸へ下り暫く水賣りをして居たりしが』といふことが書いてある。享保頃からあつたと見えます、明治になつても町々の間を水屋が歩く。これはいゝ井戸を見つけて、そこを約束してあつて、その水を賣

るのですが、本郷元町の水道橋北詰の西側、彼處にもとの上水がありました。ここには大變水賣が集つてゐて、そこから水を取つて、それを擔いで賣る、私も子供の時分に、その様子を見たことがあり、『江戸名所圖繪』などにも書いてあります。

文政度に拵へた『京江戸自慢くらべ』の中にも、

江戸 極樂といふべき國はお江戸也

京 水がきれると眼前のがき

といふことが書いてある。これは前の水ぎれの場合に、一荷百文から百十一文もするといふやうな、水の饑饉が來ることを云つたものであります。京都の者は頻に水の自慢をする。江戸の者は水道の自慢はするけれども、水の自慢は出來ない。水のいゝのがないし、多くもない。だが水道といふ大袈裟なことがしてあるといふのが自慢で、水が乏しくないとか、水がいゝとかいふことは、江

江戸の人は云へなかつた。『商人職人懐日記』などでも、江戸のことを『第一は水がわるふて、土ぼこりがして、女房はすくなし、植ごみを見ず、用事所のむさう、假初にも皮羽織、氣がつまつてならぬ』といつて指摘してゐます。水の悪いことはそんなところぢやない、もつと古くからの話で、『慶長見聞集』にも、江戸の町跡は大名町になつてしまつた——といふのは丸ノ内のことですが、今の江戸の町家といふものは、十二年前、江戸城修築の時に、海を埋めたところにあるので、町は豊に繁昌するけれども、井戸の水に鹽がさして、まことに迷惑する、といふことが書いてあります。

忘れられた鑿井

さういふわけでありますから、江戸では鑿井といふことが、いろいろな方法によつて獎勵もされ、ば研究もされ、井戸を掘るといふことは、公益事業の一

として行はれましたが、いつになつても江戸の水は十分でなかつた。そこで掘抜でない井戸でも雑水と稱して、飲料水以外に使用して居つた。それは今から見れば、比較にならないほど低率な給水量であつたに拘らず、江戸の市民は神田、玉川の兩上水の給水によつて、ともかくも凌げたといふものは、掘抜きによつて飲料水の足し前をして、その他は雑水といふので、掘抜かない水でも何でも、あらゆる水を使つたから凌げたのであります。川の少いところでありますから、川水を自由に飲料水に足して行くことはむづかしい。兩國川の如きも鹽入でありますから、綾瀬川から向うでなければ飲料水には使へません。已むを得ず多摩川の水を今日まで使つて來たわけですが、掘抜井戸の或者は、水質の上からいふと玉川のよりもいゝ水が慥にあつた。その良い水の出る掘抜井戸も潰し、雑水井戸も潰して、すべてを上水に求める。東京は益々人口が殖え、面積もひろがつて行く。一年々々と申したいが、實は一月々々どころでない、

一日々々と用水量が増して行くといふ時に當つて、甚だ乏しい上水の水を、洗濯にも使へば兩便の流し水にも使ふ、といふやうなことをして参りましたならば、とても足りつこはない、不足するにきまつた話であります。その不足を多摩川に誅求して、兩岸の農作物や住民の飲料水にまで影響さして、さうしてその水を水道によつて東京へ運んで、湯に立てゝ入る位はおろかなこと、庭の噴水にして玩具にしてゐるといふやうなことをする。何の心あつてそんなことをするか。昔の人のしたことを考へて見ますと、東京になりまして、鑿井といふことはどうしても思ひ棄てることは出来ない。のみならず上水を亂暴に費消するといふことも大に慎まなければならぬ。儉約といへば、金銭でなければならぬやうにのみ思ふほど、人間といふものは無考なものであらうか。

必需十二品

米の事は伊勢町のところで云つて置きましたが、その外に薪、これが非常に高い。炭となれば猶高い。これはその供給が困難だつた爲であります。江戸の初から炭を供給して居つたのは八王子で、甲州方面の炭を運びつける。元禄頃になりまして野州炭が出廻るやうになりましたが、だんくゝ人口が殖えて來ますから、なかゝそれでは足らない。正徳の頃には紀州熊野の炭が出廻つてをります。伊豆の天城の炭が出廻つて來るやうになつたのは天明以後だし、房州、總州の炭が出廻つて來るやうになつたのは安政前後の話です。それですから炭の代價といふものは非常に高かつた。

油は種子油と綿實の油、綿實の油は黒油、赤油といつて居りました。その外に魚油、これが燈火用です。それから胡麻の油、荏の油、髪へつける油は色油といつてゐましたが、これはまあ別として、燈火用の油が甚だ高い。米の三倍乃至四倍、酒の倍位しました。下り油問屋と地廻り問屋とあつて、丁度米河岸

の通りに問屋、仲買、小賣といふ段取になつてゐて、それを扱ふ。處が米にはないことですが、油は時々賣止をするものですから、それが爲に騒動を起しかけたことがあつた位です。吉原のやうに賑な、繁昌な場所でも、元祿前後の處では第三流位の女郎屋になると魚油を使つてゐるから、眞黒に燻つた煙がどん／＼上つてゐる。「闇の夜も吉原ばかり月夜かな」といふと景氣がいゝが、魚油を燈して黒煙が濛々としてゐたのです。芝居も日暮限りでよしてしまふ。かういふことは皆燈火の資料を缺く爲であつて、夜になれば江戸は眞暗だといつてもいゝ位である。吉原が明るいといつても、蠟燭や魚油の燈火だけの話だから、決して明るいものではない。さうして又その代價が非常に高いものだつたのであります。享保以來、物價書上の品目をきめて、上方から來る品目の入津する分量と相場を書上げさせて居りますが、安永度からは十二品書上といふことになつて、生活必需品の相場を書上げさせてゐる。それを見ると、米、

水油、これは燈火用です。酒、炭、薪、魚油、鹽、味噌、木棉、醬油、線綿、錢——この生活必需品の分量が、どうしても自給自足することは出来ない。江戸の市中で出来ないのみならず、地廻りから持つて來ても未だ足りないのです。それだから此等の代價が大變高かつた。甚しい時は前にも云つた通り賣止をやるやうなことがあつたので、幾度も大きな問題を起しかけて居ります。

娛樂の乏しい處

それからこの江戸にどの位樂しみがあつたかといふことに就て、先づ年中行事に當つて見る。まことに江戸といふところは、自然を樂しむことの出来ないところで、何とか人間が拵へ出して樂しむより仕方が無かつたことは、年中行事を眺めても直ぐわかります。概して江戸は娛樂に事を缺いてゐる。先づ初日の出。元日の高輪や洲崎が賑かだつた。初富士。この富士を見るといふことは、

關東には山が少い。何にしても關八州の平野でありますから、山らしい山が無い。富士なんぞは何よりいゝ眺めに相違ありません。だから富士見町といふのがあり、富士見坂といふのは二三箇所もあります。

神田の社地、小石川、谷中、根岸、こんなところで鶯を聞く。龜井戸、寺嶋、杉田、蒲田の梅。櫻は少々多くつて方々にある。もう江戸ツ子の力む文化、文政度になると、一本の櫻を賞翫するといふことは無くなつて、並木櫻を賞翫する時になつてゐる。並木櫻を賞翫するといふのは、花見が團體的になつた爲です。桃は中野の桃園は、もう衰へてしまひましたから、大分遠くまで踏出さないで見られない。躑躅霧嶋は日暮、大久保、染井。それから海の方では、汐干とか、鯉釣とかいふ楽しみがあつた。夏になつて杜鵑。牡丹は寺嶋の百花園、北澤の牡丹屋敷。燕子花が吾妻の森や寺嶋の蓮華寺。藤が龜井戸、坂本の圓光寺。花菖蒲は堀切。それから兩國の納涼、花火。谷中、王子、高田落合、

目白、目黒、吾妻の森、隅田堤の螢。橋場、佃嶋、寺嶋、根岸の水雞。不忍、溜池、市谷御門外、牛込御門外の蓮。それから朝顔は入谷をはじめ、方々の植木屋で見せた。秋になつて月見、蟲聞、吉原の燈籠なんていふものがある。けれども吉原まで行くには、江戸の真中からだと二里乃至三里ある。何しろ皆遠いのです。萩寺の萩だとか、巢鴨、染井、後には團子坂になつた菊細工。海晏寺、瀧野川の紅葉。冬になれば雪見といふものもある。が、秋から冬の方になつてからのものは、日が短いので遠い道を往返することが出来ない。従つてついで見物にも出られないやうになる。中にはものゝ趣なんていふことのわからない手合、即ち江戸ツ子の如きものには、とても面白味のわからないものがあるから、彼等の楽しみにならないものが多い。郊外に行樂、遊觀といふやうなもの、五里四方から十里近くまでも伸びてゐますから、先方へ行つての楽しみはあるにしても、そこまで行くのが難儀であるのみならず、その途中に別段

見るものゝ無いのがある。

一體江戸は寺社の建造物で飾立てゝあつた場所、年中行事の中で見ても知れませんが、見るといつても寺社の建物、遊ぶといつても寺社の境内で、殊に祭禮とか、法要とかいふものは、何よりの樂しみを彼等に與へる。概して江戸では人の集るのを見て喜んでゐるといふ有様で、まことに娛樂に乏しいから、ものゝ賣聲まで名物にしたり、樂しいものゝやうに考へたりする風がある。それですから芝居なんていふものが何よりの娛樂になるわけでもある。それが見世物となり、寄席といふやうなものにもなつて來ます。素人茶番もあれば、踊の御凌もある。縁日などといふものがだんく數が多くなつて、それを又樂しみにする。京坂の様子とくらべると、どうしても樂しみが少い。よくあれだけ樂しみが少くつてゐられたものだ、と今日からは思ふやうなものです。それが爲に一方では私娼がはびこつたり、博奕が流行したり、酒を飲むといふやうなこ

とも多くなるわけにもなるのであります。

馬鹿者も名物

『江戸自慢』といふ一般摺は、明和頃からいろく出てゐるやうですが、『江戸に二つないもの』といふ一枚摺も、文久から三種か四種も出てゐます。そこで面白と思ふのは、文政度に出來た『京江戸自慢くらべ』といふものです。

江戸 世の中の花によそへて江戸櫻

京 都ははなのにしき染もの

江戸 御の字の付た所は江戸計り

京 おこりのおちる大内の砂

江戸 穂の鮭、冬鱈魚に初松魚

京 鱧生鱈にわたもちの鮎

馬鹿者も名物

江戸ツ子の話

江戸 白魚の生たを直に海苔へ入
 京 へたのを焼く松茸の味
 江戸 諸大名どし〜江戸へ御参勤
 京 八百萬神大内のばん
 江戸 世を照らす光の元は東かや
 京 日月も元はこちの御先祖
 江戸 日本に江戸前鰻類はなし
 京 たくさん喰源五郎鮓
 江戸 小便を汁の實にして喰都
 京 大家のむす子くそで育る
 江戸 極樂といふべき國は御江戸也
 京 水がきれると眼前のがき

江戸 ほう髭に似合ぬ京のとらさんせ
 京 女の口で、ばかなつらだな
 江戸 いやしきは女の懸るはかりの目
 京 四百なげ出す、さてもけびたり
 江戸 江戸女、小しなまりの上はなし
 京 なせに京から舞子かへる
 江戸 役者てはすい市川に三津五郎
 京 登て恥をかきし嵐吉
 江戸 金持の寄りし本町駿河町
 京 いづれも皆な本店は京
 江戸 山の手で耳にあくほど郭公
 京 なまりのぬけし都鶯

馬鹿者も名物

江戸 江戸の金わたらぬ國はなかりけり

京 飛ばつかりはまけたわいのふ

京の者と江戸の者と名物くらべをする、その多くは京が勝つことになつてゐますが、一番しまひに、江戸の貨幣の通用しないところは無い、といふのに對して、京都人もこれには負けて、如何にもさうだといふことにしてある。金を持つてゐるといふことで威張らずに、貨幣の發行元だといつて力むのが大さう面白い。貨幣生活の時代であることもこれでわかるし、その貨幣は江戸の政令の下に出來たのだといふ、貨幣の世の中だから、その發行權があるといふので力むのは面白いが、これは江戸ツ子が考へてゐるやうに、江戸といふ土地がまさつてゐる、えらいといふ事ではあるまいと思ふ。

さうかと思ふと江戸に澤山あるものといふので、『松平稻荷伊勢屋に瘡つかき願人坊主蝨澤山』、こんな名物はどうもあまり自慢にならない。江戸の蝨が多か

つたことは、前にも引用した『近世諸家美談』の中にも、江戸では武士と蝨を恐れては住つて居られない、といふことが書いてある。これは獨身者が多かつた爲でせう。それではもう少し纏まつた江戸自慢はといふと、小川顯道の書いてゐるのがいゝと思ふ。今まで江戸自慢といつて云ひ慣はして來たものは、紫染、色摺錦繪、釣鐘の出來合、針金賣、らうのすげかへ、縫針賣、印判墨賣、火打鎌石賣、鬼灯賣——この中、針金賣以下のものは、二文か三文、せいゝく十文どまりの商内であつて、それで一家を支へて行けるといふことは、江戸の繁昌——人間が多くなるからだといふので自慢した。が、これより上にまだある、といつて小川顯道は更に次のやうなものを擧げてゐます。

火事、馬鹿者、癩病、蝮蛇、齒磨賣、織紋熨斗目、無筆手習師匠、無算勝手役、無庖丁料理人、文盲醫師、占卜者、風呂屋、

さうして説明をするのに、火事は年中、毎日のやうに無いことはない。冬か

ら春へかけては一日に三四箇所もあることがある。馬鹿者といふのは御祭のあ
 る度に、氏子がどんなに謹慎齋戒して出ることかと思ふと、自分の妻子を賣つ
 て、それで晴著を拵へて祭に出る者が多い。又釣をすることが好で、海上三四
 里も小舟に乗つて網打に行つたり、釣に出たりする。暴風が起つて来て溺死す
 ることもあり、二十里も三十里も遠くへ流されることもある。さういふ命かけ
 のやうな楽しみをする。又岡釣といつても、五里も八里も田舎の遠いところへ
 行く。江戸にゐながら釣るといふことでも、芝から深川、大川通に、八九月頃
 になると釣に出る者が多くつて、一萬人もゐるかと思はれるほど澤山出る。兩
 國から小日向の邊までに千人位、五ツ目までのところに又千人位ゐるといふわ
 けで、釣竿を擔いで一日まごごしてゐる人間が澤山ある、といつて嘲つてゐ
 る、これは如何にも馬鹿々々しいに相違無い。併しこの御祭に熱狂する馬鹿は、
 前にも云つたやうに娛樂の無いところでありましたから、御祭に出るといふこ

とが何程の楽しみであつたか。實際その日、一日が一年中の楽しみだつたので、
 それだから熱狂もする。殊に神田祭を山王祭と同様に、江戸の城内へ引込んで、
 將軍の御上覧があるやうになつたのは元祿以來の事で、それから祭といふもの
 がだん／＼賑かになつた。山王、神田の兩大祭は天下祭といふ位で、なか／＼
 盛なものでありました。それが松平樂翁公が儉約政治をやるやうになつて、非
 常な緊縮を八方に無理強ひに強ひた。その爲に暫く御祭騒ぎはやみましたが、
 寛政十年に山王祭だけ、それも子供だけが美しい著物を著て出ていゝといふ
 ことになり、又だん／＼弛んで來まして、文化に入つて來ると、一遍押へられ
 たのが弛んだのだから、ひどく御祭熱が強くなつて來た。山王祭に四五歳にな
 る女の子を著飾らして、駕籠に乗せて引すり歩いたところが、子供は駕籠の中
 で死んでしまつた、といふ話がある。子供は例外だといふので、子供が御祭へ
 出るのに大變費用をかけるやうになつた。一人の子を御祭へ出す爲に、五百兩

も千兩もかけるやうになる。武士の方に見ると、五百兩の収入は千石、千兩になると二千石の收得でなければならぬ。それを僅か二三日の御祭の爲に使つてしまふ。又踊屋臺などに娘を出すといふことも始まつて来る。家齊將軍の後半は奥向の女達が幅を利かせるので、御祭をする町々へ内命を下して、屋臺や山車を好んで出させる。殊に踊などの御好みがなか／＼ありまして、御祭とか、御雇祭とかいふ名稱さへ出来て、益々盛になつて来た。深川八幡の御祭の時に、永代橋が落ちて八百餘人の水死者を出したことがあります。これは文化四年八月十九日の話で、どうしてそんな事が起つたかといひますと、文化のはじまりまで、久しく御祭を立派にすることを許されなかつたのが弛んで来た。その機會に深川の地元の者が大に張込んで、下町以上の費用をかけてお祭りを立派にやらうとする。その噂を聞いて、十何年來、御祭らしい御祭を見られなかつたが、今度は久しぶりでそれが見られるといふので、江戸中の者が集

つた。いつもと違つた人出があつた爲に、永代橋が落ちるやうな騒ぎが起つたので、かういふ事も實は松平定信の儉約政治の影響であります。それから後は例の御用祭、御雇祭の勢で、一年々々御祭が盛になつて来た。天保の改革で又少し衰へても、おきに跳ね返る。抑へる爲に却つて跳返す力が強くなるやうな氣味があつた。娘を賣つて、その金で著物を拵へて祭へ出るといふやうな親は、東京になつてからもまだ絶えない。明治三十一年の一枚摺、『馬鹿利發の取組』の中に『祭り揚句に娘を賣る親』といふのがある。その位御祭には熱狂したのです。

それから釣ですが、釣に就ては享保以來いろ／＼な著述さへ出来てゐる。道具もいろ／＼と工夫されてゐます。釣といふものは實に江戸では何時も廢らな

い娛樂でありました。海へ遠く出かけるのもあり、岡釣もありましたが、釣に出る人達に就て見ると、旗本御家人は申すに及ばず、町家の者まで身分の隔り

もなく、大分澤山の釣好がゐたのです。さうして無駄な時間を費す。馬鹿といへば馬鹿のやうなものだが、さて楽しみの中の少いところだから、已むを得ないとはいへば又さうも思はれる。いづれにも名物には相違ありません。

ヨイ〜が看板

その次の癩病は澤山あるのではない、無い方の名物なのです。小川顯道も、若い時から江戸の者ではたつた一人見た、その餘の者は他國生れである、乞食の中などにはさういふ病人が澤山あるが、それは江戸で生れた者ではない、江戸を離れれば澤山ある、といふことを書いてあります。が、顯道は醫者であるのに、どうして『ヨイ〜』の事を云はなかつたか。『續飛鳥川』に文化、文政の流行物を擧げて、『和唐紙、いさみ、居候、吉原俄、半田稻荷、ヨイ〜、張子の松茸、八里半』と書いてある。これは『類中』といつて、寶曆の頃から少

しづつあつたのですが、文化の頃にはなかく多くなつて來てゐる。『浮世風呂』の中にも『ヨイ〜』が出て來るが、文政九年に出來た『稽古三味線』の中には、かういふ問答がある。

『田舎ものにはヨイ〜といふ病ひはねエせ、

『江戸ツ子ばかりか、夫じやア江戸ツ子の看板だナ、ありがてへ、強さらしだ、

これは江戸の或階級の者は年中腰きり半纏一つで、身體の冷えるのに構はず居つて、江戸ツ子の自慢にする熱い湯へ入る。さういふ事がこの病氣を起すもとだとかいつて、明治になつては錢湯の溫度を法令できめるなんていふことが出來た。何故かういふ病氣が起つたか、私にはわからないけれども、江戸ツ子に『ヨイ〜』の多かつたことは事實です。これも名物に數へていふと思ふ。蝮蛇、これはゐない方で擧げてあるのですが、江戸四里四方といふけれども、

六七里四方の中にはゐない、と書いてある。これも慥にゐなかつたやうです。齒磨賣は一袋六文八文のもので、それを買へば一袋で、一箇月も二箇月も使ふ。然も方々で賣つてゐるのに、まだ賣廻る者が澤山ゐるといふことは、江戸の名物だと云つてゐる。この江戸ツ子が齒磨を使ふといふことも、潔癖を現すものであるかも知れません。齒を白くする爲に、房州砂の入つた齒磨を使つて、齒の心の減るほどこする。齒は眞白でないといけない。これは江戸の者の殊に好むところでありました。それも古くからあつたのですが、特に四代目菊五郎が齒磨賣になつた——嘉永、安政頃から多くなつた。『お早う』の齒磨賣、毎朝早く齒磨を入れた箱を緋縮緬の紐で肩へ掛け、『お早う』と云つて賣りに來るから名です、なか／＼意氣な姿だつたといひます、芝居にしてから急に人氣が出て、餘計に商内があるやうになつた。大體齒磨を使ふか使はないかで、江戸ツ子か田舎者がわかる位、ちよつとした惡對にも『口中が臭いぞ、黙つてゐろ』

と云つたものです。齒の白いのが羨しくて、薦つ被りも齒が白くなれば一人前、とさへいひました。齒が白くならなければ一人前でないやうに思つた。地の上へごろ／＼寐て濕氣を受ける。それが強くなるほど齒は白くなるといつたもので、濕氣を受けて病身になつても、齒が白くなればいゝと思ふほど、無考であつたのがをかしい。

織紋の熨斗目といふのは、熨斗目地に織紋をつけて賣る。自分の家の定紋のついたのを選択にして買ふので、そんな重寶な事は外には無いといふのです。無筆の手習師匠、これは例の御家流といふのできまつてゐますから、楷書といふものを知りません。字畫を正すといふことになれば、まるでわからない。それでも濟んだ。これも餘所の土地には無い。畢竟江戸の者が無學だといふことになる。手習に行く者が少いので、熊さんや八さんは無論手習師匠のところへなんぞ行くものぢやありません。

醫者でも無學

算盤を知らぬ勝手役、一方には仕送用人なんていふ物凄いのがある代りに、算盤を知らないで主人の勘定方をつとめる者もゐたのです。料理人にしましたところが、例の庖丁家の事は知らないのですから、厳密にいへば料理人といふわけに行かない。それでも料理番で通つてゐる。成程、他の地方から見たら、をかしくもあり、變なものでもありましたらう。けれども江戸は例の町料理、惣菜料理といふものが發達したところだから、かういふものが出來て來るのであります。

文盲の醫者、これは醫者が醫學をしないのです。『學醫は匙がまはらぬ』といひまして、江戸の人はどういふものか、學醫でない方を喜んだ。つまりお醫者さんの直なのを喜ぶ方から來てゐるんだらうと思ふ。醫者の弟子としては、素

問や靈樞の講釋をさへすることは無い。家傳の藥方を弟子に譲るまでで、醫書の名も知らなければ、古來の名醫の名さへ知らない。一體江戸の醫者は京都修行といつて、明和以前は皆京都へ行つたものです、多紀家が醫學館を興すまでは、江戸で修行することが出來なかつた。吉宗將軍は享保以來、醫學及本草に就てはひどく獎勵して丹誠されたのですが、なか／＼その効果は顯れなかつたのであります。太鼓醫者とか何とかいはれるたちの醫者が多く、醫者は頓智がよくなければいけない、とばかり思つて居りました。

占卜者は人相見であるとか、墨色判断であるとか、いろ／＼の名をつけて、野天へ出て居るのもあれば、家を構へてゐるものもあり、なか／＼盛でありました。江戸の人間はものがわからない爲に迷信が強く、無理にも自分の思ふことを遂げたがる風があるからだらう、と小川顯道は云つてゐます。

最後に、風呂屋、江戸の湯屋といふものは、上方なんぞに比べると、慥に綺

麗なもので、且規模の大きいものでありました。風呂槽一つで二十人以上も入れるやうなものは、餘所の國には無いし、朝から湯の焚いてあるところも無い。それから又數が多い。湯屋の數が多くなつたのは、江戸の半を過ぎた頃の話で、元祿、享保の際はまだ、風呂の數も少かつたのです。天保改革の時には四百七十軒あつたのが、慶應三年には五百五十軒になつてゐる。明治になつては忽ち倍位になつてゐたらうと思ひます。江戸の湯屋が朝夕は大變込みました、江戸ツ子は烏カアで飛び込んで来る、仕事を済して又た来る、一日に二度の入浴は極つたやうでした、薄著でも寒い顔をしな、尻を晒して居てもカジケない、好んで熱湯に這入るのは、暖をこゝに取るためである、ですから江戸ツ子の内には渡世柄で、一日に數浴を缺き難いものもゐたのです。

文久度の一枚刷

有合せた一枚摺で、文久度のものと思ひますが、『そこが江戸』といふのがあります。これに擧げてあるのは、錦繪。河東節。もうこれは廢れた方で、物數寄に或人々が嗜んだ位のものでせう。木遣の聲、これはだんく盛になつて来るばかりでありましたし、上方のとは違つてゐます。始末屋。これは女郎買に行つて、をさまりのつかないやつが始末屋へ来る。其處で著物を脱がして勘定を附けるので、嘉永度からあつたものゝやうですが、無論餘所にはありません。飛んだ名物です。女の革羽織。男装の餘波が爰まで来るのですが、大體江戸の女はいかついなりをします。仕事も男のすることをしてしました。麥湯、これは夜店で、街頭に赤い大行燈を出して麥湯を賣る。天保以後のもので、暗いところへぼんやりと灯をつけて、よく出てゐた。皆涼みながらそこへ行つて、麥湯とか、櫻湯とかいふものを飲んだものです。水菓子。これは西瓜とか眞桑瓜とかいつた處で、今日に比べれば品數も少しいし、賣行も少しい。大體夏向のもので

今日のやうに年中賣つてゐるわけではありません。ひめ糊の卸、ひめ糊は大抵一文菓子屋で賣つてゐた。是は一文商内といったものゝ一つで、誰しも一度に澤山買ふものゝない商品です。その僅づつ賣るひめ糊の卸屋があるといふことが、江戸の名物であるわけなのでせう。日濟借。これは烏金とも稱したやつで、日割にして元利共返して行く。僅な金を借りるのに、大變高い利息を取られる。これは細民のあつた證據でもあり、細元手で棒手が成立つてゐる事の證據でもある。初鯉。是は云ふまでもない、紫。これは武藏野の名物になつてゐますが、その名物の紫草は絶えてゐますから、文久度には本當の紫は無い。けれども江戸紫といふので、傳統的に名前だけの名物になつてゐる。それから白魚。これは隅田川から佃邊で取れるのが、なか／＼の名物になつてゐた。居残りの闇取。これは錢の無いやつが大勢で女郎買に行き、あとへ残る番のやつを闇引できめるのです。そんな馬鹿な事は餘所の地方ぢやありません。

まい。裸參。これもなか／＼多い。寒三十日或る神社なり、佛閣なりへ參るの、若い者などは裸參をしようと、わざまへがよくなると云つてやつたものです。夜店の立食。焼芋。いろは長屋、これは澤山あつた。地獄の釜。といふのがありませんが、これは何の事かわかりません。水屋は例の一荷四文で賣りに来るやつ。朝湯。辻聲色。なまけ者。このなまけ者といふのは如何にも澤山居りました。相當に働けて錢取が出来る癖に、どういふものか無性になつてしまふのです。蚊遣香。本所は大晦日まで蚊がゐるといつた、下町でも蚊はひどい、従つて蚊えぶしは盛だ、蚊遣香も古くからありました。天道干といふのは露店のこととで、いろ／＼なものゝ露店があつた。背中の文身。鯉節のかき賣。長命丸。これは媚藥です。上方の方では元祿度から大分澤山賣るところがあつたやうですが、江戸にはさう餘計は無い、一二軒位のものだつたやうです。かういふものゝ需要者が多くない。少いことが却つて名物になつたんぢやないかと思ふ。

上方と江戸とは、江戸の人間の方がさつぱりしてゐるから、用ゐる人も上方より少い。これはわ印を見ても知れることで、上方の方が大分あくどく書いてある。

吉原の俄、うろく舟。酔倒れ。月代の質入。これは雲助が禪を質に入れたのと同じ事で、請出すまでは月代を剃ることが出来ない。かういふことをするのには多く職人手合ですが、質を請けないうちは、決して月代を剃らなかつた。そこに面白いところもある。それから桂庵。駕籠屋のかけ聲。これも上方と違つてゐます。煤でて賣る菜。朔日丸。これは墮胎避妊の薬です。上方ではなかく澤山賣つてゐたやうですが、江戸はこれも一二軒しか無かつた。賣手の少いことが江戸の名物だつたらうと思ふ。賣手も買手も少いだけに、それが目立つ。目立つのが江戸の名物でありはしないか。

辻へたれる小便。夜鷹蕎麥。傳説では火氣を持廻る夜商人を禁制した時に、

公方様の御鷹を訓練するために御鷹匠が、夜鷹に出る、その夜鷹に出た御鷹匠のために、深更になつての仕度を供給するのを條件にして、特別に許可されたのが夜鷹蕎麥だといふ、何にしても夜鷹蕎麥は夜間の行商だ、夜明しの稼業だけに、晝間は寐てゐる、深更に食物を買ふものが常に江戸にはあつたのだ、糝粉細工。この糝粉細工は子供の玩具ばかりでない、大人が賞翫してもいゝほど巧みに、且大きく拵へる。こゝには糝粉だけ擧げてあるが、飴細工も同様で、なか／＼立派なものを拵へました。おやんなんし。是は歌比丘尼です。附き馬。これは女郎買に行つて、錢の無いやつが牛をつれて歸つて來るのをいふ。それから喧嘩。馬鹿囃子。これは寶曆度に葛西で發生したもので、祇園囃子や鎌倉囃子とも違つてゐる、江戸獨得のもので、檻樓問屋。車のかけ聲。これも大八車です。上方とは違つて居りませう。犬の食物。といふのは酔倒れの反吐でせう。鰻の蒲焼。これは焼方が違つてゐる。借馬。ぼんでん。これは大山參で

す。仲直り。辻番の商。これも上方にはありますまい。町飛脚。これは安政度からある。神佛の開帳。祭師。子子取。俳諧の點取。早呑込。石佛の願掛。一兩が花火。これは川開の時に。自分の懐から出して特別に揚げるのです。新酒の勢。これは新川、新堀で新酒が著くと酒配りといふことをする。新川、新堀の若い者が元氣を見せる。なか／＼景氣のいゝものだつたさうです。日本橋の朝市。出稼の人別。これは天保改革以來の事で、今の寄留です。踊道具の損料。踊の御凌とか何とかいふ風で、踊に關する催しが多くなつたから、かういふことが起つた。踊が江戸で盛だつたことを證據立てるものでせう。釘拾ひは火事のあつた處へゾロ／＼出てゐた。千羽鶴。是は紙で折つて神社佛閣へ納めるのです。干海苔。味噌摺用人。これは仕送用人の悪口です。小便無用の稻荷。これは紙に書いて塀なんぞに貼つてある。小便を防ぐ爲に御稻荷様を持出すところが珍しい。川開の夕立。これは亂脈極るものだから珍しかつたの

でせう。酒樽の曲持。神田の鬼熊なんていふのが名高かつた。酒問屋で酒樽を扱ふのに、手慣れてゐるのと、力の強いのがゐたのとで、こんなことをやつた。富澤町の朝市。これは古著市。水道の水。いろは組。これは町火消のことです。市川團十郎。川柳の宗匠。こんなものは餘所にはありませんまい。兩社の御祭禮。これは神田と山王の兩社で、前に云つた天下祭です。御大名の武鑑。江戸で二版あるが、他の地方には無いのだから、名物だといつたのでせう。

上方から見た名物

江戸の者が自分で自慢を云つてゐた事の外に、大坂の方から見たもの——寛政七年版の『鳩觀雜話』といふものがあつて、その序文に、流行物の事を云ふには、江戸を見て來なければ話にならない、といつて、さうして江戸の評判をしてゐる。僅な箇條だが、岡目八目で大分面白いことがあります。

先づ四里四方の大ききから、大名屋敷の立派なことを褒めた。次に『珍しき
 は子規のふるほど啼と團十郎の鼻』、これは格別いふことも無い。『すさまじきも
 のは大下馬の登城日と梅若の忌日』、この頃向嶋は幾分か賑かになつたでせう
 が、大下馬の繁昌と比較するのはどんなものか。諸大名が登城される、その供方
 や何かでは随分な人になる。その賑はしさ、はでくしさと、木母寺へ集まる
 町人百姓の數、數からいつても比較になるまいと思ふ。けれども民間の賑はし
 さとしては、當時木母寺の群集が著しいものであつたといふことは、上方の
 人にも目立つたものでせう。

『きつとしたものは女中方の代參と吉原の八朔』、これも随分ひどい見方で、武
 家奉公をする女と、吉原の八朔とを比べる。遊女との比較は随分亂暴なものだ
 と思はれるが、それはそれとして、文化程度までは御殿女中を櫻鯛に見立て、褒
 めてゐるのがある。『女見立魚つくし』といふものでは、『匂ひには誰もこがる

ゝ鰻哉』といふ句を出してゐる。御殿女中といへば大分人の目について、大に
 騒いだものであつた。『御殿女中とビイドロ船は』といふ唄もありましたが、間
 もなく安政になると、大女——不恰好なものだといふ評判になり、家鴨が文庫
 背負つたやうなさままで歩いてゐる、と悪口を云ふやうになつた。この御殿女中
 の評判が變つて行つたといふことも、江戸中の心持が何程移り變つて行つた
 か、といふことを考へられもするし、民間の女どものけはひ、化粧の仕方が違
 つて來、姿形までも違つて來るやうになつた、といふことが注意される。

防火設備と耐震家屋

『うつくしきものは大通の頭と藏造りの家』、これは商家が土藏造りになつたり、
 辻番さへも塗家のが出来た位で、安政の地震前のところでは、専ら防火設備が
 多くなつた。その爲に上方よりも町家の土藏造りが多くなつた。江戸では大き

な火事があると、防火設備を考へる。火事の多いところだけに、塗家といふものがだん／＼出来て来るが、六七十年目位には大きな地震があつて、その後はいつでも又耐震の方を考へるやうになる。江戸の建築といふものを眺めて行くと、いつでも防火といふ事と耐震といふ事とで、彼方へ片寄り此方へ片寄りしてゐる。尤も日本の建築としては、防火と耐震と両方の設備をすることは出来ないのですから、大きな火事、大きな地震といふ度に、何方か一方へ傾いて行くわけでもある。安政の地震前に在つては、防火の方に力が入つてゐたといふのも、合點の出来る事でありませう。

『多きものは狂歌と犬のふん』、狂歌も天明以來江戸風の狂歌が出来て、それはなかく／＼盛であつた。犬の糞は『伊勢屋稻荷に犬の糞』といつて江戸に多いもの、其角の手紙の中にも、江戸へ下つて犬の糞を踏んだらどうだ、といふふざけたのがあつた。随分昔からの名物だが、飛んだ名物だ。

女に大騒ぎ

『はやるものは能囃のある茶店と阿蘭陀學問』、オランダ學問の進歩の爲に、日本の御醫者の方向が變つて来た。それは無論大した事に相違無い。いゝ囃のある茶店の方も、寶曆以來、湊屋のおろくどとか、笠森おせんだとか、浪花屋のおきただとかいふ名高いのが出て、大評判を取つてから、茶屋町にはいゝ女を置くやうになり、いろ／＼茶屋女に就ての話もある。一體江戸の商家では、店先へ女を出さないといふのが從來の仕来りで、女商人といふものが江戸には少い。少いといふよりも、寧ろ殆ど無いといつていゝ位のものである。けれども江戸は女の少いところだから、いゝのがあれば評判になる。茶屋女どころぢやない、神子でさへ騒ぐ。明和六年の三月、湯嶋天神で泉州石津の戎の開帳があつた時に、お波、おはつといふ二人の神子が来た。この神子が女がいゝといふ

ので一枚繪に出た。それが爲に參詣人も大變多かつた、といふことであります。江戸ツ子の時分になつて考へれば、神子に夢中になつて騒ぐなんていふことはをかしいやうな氣がするけれども、笠森おせん、湊屋おろく、浪花屋おきたなどに騒ぐ時分の江戸の者は、湯嶋の神子に大騒ぎをしたほどであつた。

さてそれほど大騒ぎをする女がどんなどといふと、『涙のこぼれるものは地女のきたなさと四十七士の碑』といつてゐる。寛政度には町の女がきたなかつたと見える。關東生の者は男女共に色が黒いといふとは、浮世草子でもさんざん云はれてゐるが、それから五十年たつた安政度になると、江戸の女は色が白い、首筋と足が格別に綺麗だから、寒中でも足袋を穿かない、外八文字に歩いてゐる柳腰のうしろつきのいゝことは何とも云はれない、といつて上方者が褒めてゐる。それだけ江戸の女は變化してゐるのです。女がよくなつて來るから女に就て騒ぐことは益々ひどくなつて來るわけで、市中の様子で見ると、男八

九分に對し女一二分しかゐないやうに思はれる、と上方の人が見て云つてゐる婦女といへば夢中になつて騒ぐ、異性の方にも變態な者がありました。男の方にも仰天させられるのがゐた、元祿十六年版の『俳諧いかりづな』に、

きのどくや、尻つめらるゝ親子づれ

といふのがあり、『當世穴さがし』(明和七年版)にも『娘や若後家は參詣しても、驚や蘇鉄の作物に、氣をぬかれてゐる内に、尻はあざだらけに成』と書いてある。群集の中へ出れば尻を叩かれるやら、撫でられるやら、痣が出来る程なこと、それ以上な悪戯をされることが珍しくない、古老から聞いて置いた昔話には、随分大變なものがあつて、爰へ書くのに困るやうなのが澤山ある。娘や若い女房の困つたなどいふことは珍しい方ではなかつた。明治の末に名高かつた大久保のデバ龜の浴場覗きも、江戸ではザラにあつた、今も時々省線を騒がせる雪隠覗きも、一向新しいことではありません、『名人ぬき書

とつちりとん』は文久版ですが、

わしがてい主にやあいそが盡る、酒が過ぎると管をまく、出ると喧嘩か色狂ひ、『新造年増のきらいなく、見るのが道樂

で、其手でいきなりつまみ喰ひ、自分が喰ふのはよけれども、『つまんでよこすにやおそれ升、

に至つては、全く話すに忍びない。江戸ツ子なる者に愛憎がつきる、實に唾棄すべき人間だと思ふ。勿論その一部分に斯うした者があつたのであるが、それは極少数者にもせよ、殆ど常習であつたのだから、『流れ川で尻を洗つた』を標榜して、財布だけを證據にして見せたやうなものではない。更に『大江戸春秋』に元祿度に女の髮切が流行したことが見え、又明和四、五の兩年、文化七年、弘化元年等にも繰返された、此の犯人が色情狂であつた證據もある、天保元年には女の臀部を傷ける流行もあつたことは、從來餘り注意されてゐない江戸の出

來事であるが、是は容易ならぬ問題である、此の犯人が江戸ツ子だけではなく色々な方向から出てゐるが、狐つかひだとか魔物の仕業だとかいふのではないことは確實だ、病的な江戸の研究は、健康な江戸の研究と共に頗る大切だと思ふ。怪しからぬ病状を起す根本は、婦女といへば大騒ぎをする、其處にあるのだ。嘉永六年の市民の數を見ると、男二十九萬五千四百五十三人で、女が二十七萬九千四百七十四人とある。その前のところも大抵そんな釣合のやうですから女の多い氣遣は無い。併し實際は、女の數が少いといふよりも、獨身者が多い。士にしても、町人にしても、江戸は獨身者の多いところだつたのです。

驕妻やら姐御やら

それだから江戸は女の羽振のいゝところだ。それも昨日や今日はじまつた事ではなくて、慶安二年六月の町觸を見ると、夫の事をおろそかに思ひ、大茶を

飲み、物參や遊山の好きな女房を離別せよ、といふことが書いてある。女の氣が驕つてゐる。驕妻だ。上方には銜妻といふ言葉がありますが、江戸の婦女は驕妻で、驕つてゐるのである。女が綺麗に見える、見えないといふよりも、女の数が少い。夫婦者が少くつて獨身者が多い爲に、どうしても女が威張る。従つて女の風俗が荒つぽい。もう寛保、延享度から、尻からげで歩く女がいくらもあつた、手を振つて歩く、男のやうな歩き方をする女は、元祿の頃からあつたのです。大體が男装に近いもので、上方で男装といへば、若衆風にするのだが、江戸の女はさうでなしに生男の風を學ぶ。寶曆度には男の格氣を叱る女が多くなつた。男に似合はない、焼餅深いといつて叱る。それから上方では疾くからはやつてゐたのですが、赤い禪を締める者が出來て來た。これも上方に比べると五十年も後れてゐるやうだが、同じ赤い禪でも、江戸のには伊達な心持がある。芝居の俠客が赤い襦袢を著たり、魚河岸の者が赤い襦袢を著たりする

のと同じ心持で、はでやかにしようとするのです。明和の頃になると、一つ前に著物を著て、股まで白粉をつけて、大道を濶歩する女があつた。亭主が水汲をして、女房が火燧にゐるといふやうなことは、もうその頃からあつたのです。寛政頃となれば女がどん／＼煙草をのみ、勝手の事は亭主まかせにして大酒を飲んでゐる。さういふ女房が出來て來た。文化頃になると武家風を野暮として、民間の風俗を意氣であるとする。コテ塗の女なんていふものは無い。大模様の著物などを著て喜ぶ者は無い。又この頃になると、武家の方では逗留とか客分とかいふ名義で妻を迎へる。民間では引越女房なんていふのが出來て來たもうそれから夫婦喧嘩をしても男が勝てなくなつた。女が益々強氣になつて來る。奇體なことに又江戸では、男にあまりしやべるのはないが、女は皆おしやべりだ。子供の時から『おちやつびい』なんていはれて、よく舌の廻るやつがある。それが愛敬でもあるやうに思はれてゐた。だが男の方には少い。それも

武家風の影響だといふのかも知れないが、却つて武家屋敷の方が風俗が亂れてゐる。民間の女は餘りに威張り散す景氣の爲もあつたらうし、負けない氣からそんなさまの悪い事はしないとふい風があつたやうです。

文政から天保までの間の流行を見ると、女の髪はだん／＼油をつけなくなつて、洗髪のやうになつて来る。遊女は早くから髪へ油をつけず、顔へ白粉を塗らないのが伊達でありましたが、それは生地のいゝのを見せる爲だ。それとは違つて男らしいやうに見せる爲にさつぱりとするのがはやつたのです。又踊子が男鬘に結つてゐる。子供だから無論鐵漿をつける筈は無い。白齒で然も元氣よくやつてゐる。それを真似てだん／＼白齒の女房が出て来る。又男の額は丸額なのに、女が額を抜くやうになつて来た。こゝらのところは男と女とが振替つたやうな有様で、化政度の女にはなか／＼元氣者が居ります。前にも云つた湯嶋のおよし、鳶の頭の後家なのですが、亭主に別れた後まで輩下の者を引

廻して、大威張な姐御だつた。江戸では芝の神明、湯嶋の天神、市ヶ谷八幡、是を宮地の三芝居といひまして、檜舞臺の外の芝居でした、湯嶋天神の境内にある宮地芝居は、その三つの中でも一番大きいものだつたので、なか／＼名高いものでありましたが、或時その芝居へ氣違みたいなのがやつて来て、抜刀であばれる。誰も取押へる者がありません。その時におよしが、これはそのまゝにしては置かれなないと云つて、著てゐた著物をぼんと脱ぎますと、眞裸になつて、拔身を振廻してゐるやつ側の側へする／＼と寄つて、優しい聲で『何をなさいます』と云つた。女が不思議な姿で側へ来て、優しい言葉をかけるものです。すから、今まであばれてゐたやつも少し調子外れの氣味で、ぼんやり立つておよしの方を見てゐる。そのひまにおよしは相手の手首を押へて、刀を取上げてしまつた。それで怪我人も出来ず、何事もなしに片づいた。かういふ事をするものですから、この女が大變評判になりました、喧嘩があるといつも出かけて

行つては、眞裸になつてその中へ飛込む。一體俠客とか稱せられる者が、素裸で喧譁の中へ飛込んで行くといふことは、何も持つてゐない、雙方に敵意が無い、といふことを現す爲なのですが、それは男子の話、女子が禪まで取つて飛込んで行くといふことをするのは、随分飛んでもない話のやうに思はれる。併し此等の女としていへば、人の氣持を押へつけるだけの働きがあるといはなければならぬ。このおよしなどは××の側に蟹の這込むところを文身にしてゐた。顔立も綺麗な、色白な女である上に、飛んでもない文身までして、案外な舉動をする。先づ人をびつくりさせてかゝる。さういふところを賣物にして首尾よく姐御になりましたのです。

本所のおかく

かういふ風俗は後々まであつて、弘化三年の一枚摺『世界穴さがし』に、『強

相だ、せなか一ぱい女のほり物』といふのがあります。およしと殆ど同時におかくといふ女がありました。これは回向院の裏手に住んでゐて、常に博奕場に入して居りましたが、これにはさすがに人の悪いので知られてゐたがエン共も文句が云へなかつた。この女も尻に蟹の文身をして、その蟹の手が××のところへ届くやうになつてゐる。さうして毎朝銭湯へ行く歸り道は、眞裸に緋縮緬の禪一つといふ風で、立小便までしたといふのだから、随分無法な女だ。そればかりぢやない。或時質屋へ行つて、身ぐるみ脱いで質に置いて、眞裸でその金を受取らうとすると、隠し所が見えたといつて店の者が笑つた。さうするとおかくは、隠し所の無い女が何處にある、世界中の女にあるものが己にだけ無いのならば、笑はれても仕方が無いが、あるものがあるのに何がをかしい、といふわけで云懸りをつけて動かない。たうとうその質屋で金を出して、質物まで返して、漸く歸つて貰つた。かういふやうな事が時折ありました。博奕を打

つて強請をする。こんな女が、又一方では人の喧嘩を仲裁する、といふやうなことをして、それで評判な女になり、えら者だとも云はれたのであります。

半四郎のいかづちお鶴

芝居の方では早く安永度に、市村座で奴の小萬の芝居をして、女が士をさへ手込にするやうな狂言をやる。寛政には『白浪五人女』といふ芝居がある。享和三年十一月には中村座で、半四郎が『いかづちお鶴』といふ女達の芝居をやつて居ります。荻江節の方でも『女助六』なんていふのがあつて、日傘を真直に持つて、大嶋田に黒羽二重の著付か何かで押出さうとする。芝居の方が先廻りをしてそんなものをやつてゐるから、およしだのおかくだのといふやうな、滅法界な女も出て来るわけではないだらうが、例の通り芝居と江戸風俗とは妙な係り合を持つてゐる。默阿彌なんぞの作物にも、女の強請場が澤山あつて、なか

くうまい事を云はせてゐるし、實際に於ても女の方がよくしやべる。無論しやべるのも男と同じ言葉で、上方のやうに優しい言葉を遣つてゐるんぢやない。次に挙げる『浮れ草』の中の『國なまより』なんていふ唄は、女に不似合な言葉を嗤つてゐるやうであります。全く江戸の女の言葉といふものは、さつぱりしてゐる。べたつかないといふことは慥だけれども、それを少し飛越してゐるかと思はれるほどのものであります。

江戸の人、東詞と自慢もおかし、女子のくせに何じややら、馬鹿なつらじやの、べらぼうだの、とんだ間抜けが、しやれるナ、つらみやがれとはしたなく、男なりけり鶏がなく、東詞を加茂川で、洗うてみたい京の水。

寶曆以降の混成語

勿論かういふ事は上等の人達には無いことで、中から下の方の話です。一體江戸言葉、江戸訛、関東べい、東訛といふやうなものは、中流以上の人の言葉には聞かれないもので、これは早く昔の人も云つてゐる。江戸だからといつても、上等の人々は、ちつとも言葉に變りが無い。日本中押通したものだ。殿様なんていふ人達になれば、奥州大名も西國大名も話がわからないやうなことは決して無い。それほどでなくても中等以上の人であれば、武士にしる、町人にしろ、御互にわからないやうな言葉は遣はない。ところが民間の言葉になりますと往けません、何にしても江戸は諸國の人の集つて來るところだから、どうしても方々の國の言葉をまじくつたやうなものになる。下司下郎といふ畠では、随分滅茶々々な言葉を遣つてゐる。江戸のうちでも僅か二十町も隔ると、もう言葉が違つてゐます。例へば『お前見なすつたか』といふのが、『おめえ見なつたか』といふ風になる。江戸のうちでさへ、それだけ違つてゐるのだから、

江戸の言葉が滅茶々々であることは、江戸の言葉を最もよく寫した式亭三馬も云つてゐます。

それでは江戸の言葉が何時頃から出來たかといへば、先づ寶曆の頃で、もう天明時分になりますと、田舎言葉々々々と云つて、他地方の言葉を一切嫌つて、その詮義がやかましくなつてゐる。やがて言葉の上の江戸ツ子が出てゐる。況してそれが化政度になつては、中本の上で見てもなか／＼甚しい。といつて自分達の遣ふ言葉が正しいものかといへば、片言やら、略言やら、訛やらで滅茶々々なものでありますが、それでも江戸言葉だといふので、大力みをしてゐる。越谷吾山は、西の方には直音と平聲が多く、東の方には拗音と上聲が多い、といつてゐる。如何にも『物類稱呼』を拵へただけあつて、かうして分ければ、そんなものかとも思はれる。寶曆度に出來た『下手談義』は、『萬嚴として男の詞は世界第一、上方筋の様に髭喰をらして、はてなんのいな、わしや

そふでないわいの、よさんせ、くさんせの弱氣た詞ことばではない、と云つてゐますが、上方言葉が意氣地無いやうに聞かれ、廻り諄いやうに聞かれる、それに對して江戸の言葉はすぐれたものである、といつて力んでゐる。この頃が江戸の言葉の大凡きまつた時のやうに思はれます。

元來江戸の言葉はどんなものであるかといふと、『慶長見聞集』に『都人問ふもはづかし舌だみて、うきことわりを何と答へん』といふ歌が出てゐる。舌だみて即ち舌が鈍い、軽くない。唇も薄くない。だから唇音だの、舌音だのといふものは、上方や四國の人のやうには行かない。寛文年中の江戸の流行物を擧げた中に、『まづ年頃のかたくは立身せんと朝公儀、三河言葉をにせ廻り、そらいんぎんのきつとばる』といふ文句がある。これは江戸のはじめ以來、三河の者が大勢入り込んで来て、それが主人になつたわけですから、三河言葉が盛になつた。少し改まつた言葉を云はうとすれば京言葉が入る、三河と、京と、

關東と、この三つがごつちやになつて行くわけです。三河言葉といふものも、京都や大阪の言葉とは大分違ふ。手近いところで申せば『三河本願寺宗一揆記』あれに書き込まれてゐるのが、三河言葉の面影を見るのに一番いゝやうに思ふ江戸の最初の言葉は、三河言葉が主となつて、京言葉が入つたものでありまして、それから六方言言葉といふものが出來た。言葉のはすみのぬるいのを嫌つて、片言になつてもいゝから、元氣よく云はうとする。それが六方言言葉といふやつで、寛文四年に切腹した山中源左衛門といふ旗本奴、その辭世だといつて傳はつてゐる歌があります。果して山中の辭世であるかどうか知らないが、彼等の強がつた言葉の様子は知れます。

氣ノツマル娑婆ニ中々居度ナイ地獄ノ方へ店ガヘヲセン
落スナラ地獄ノ釜ヲツンヌイテアボウラセツニ損ヲサセベイ
若僧ト見テマヨヒヌル地藏ドノ情カケタイタノムヅクニウ

風ノマヘノトモシ火ナレヤ十郎左消タヨ水野アワガヤシキデ
 カヒ見レバ三千石モ餘所ノモノ知行モ同ジスキト月ノ夜
 エンマドノオ髭ノチリヲトリ申トフシテダヘヤ極樂ノ木戸
 同じ寛文七年の『奴俳諧』、この附合の表だけ出して置きませう。

若竹だ世に囃歌や清十郎ぶし

おなつの空にほゆる郭公

短夜に星の親ぢの月澄て

端居にねまり呑むは大酒

ふら〜と市のかりやをのめり出

やらみたくなの牛を引也

田をかへすかへす〜もういわざだ

春風もまたさむつこき里

それからもう一つ『雑兵物語』といふものがある。この中の短いのを一つ擧げることにします。

馬 口 取

孫 八

今日の責合に味方が勝になつたんべいならば、さだめて川越があるべい、昨日の大雨で河の水が増べい、さだめて矢をつくよりもはやかんべい、手綱によりをかけ、腹帯をかつちとひつちめ、鎧に下繩を引付た、障泥をひつばないて捨べいと思つたが、跡の四緒手にたおひの如くひつ付た、其なりいかに申に、旦那がしき皮を持たない所で敷皮にすべいとおもふ、又今時敵地へふんごんたらば麥穂があんべいに、ひんもぎつて金笠に入て障泥の裏を貳枚ひつかさねてこすれば、むぎのとげがつんぬけるもんだ、所でいや〜これは大事のものだと思つて尻輪へ引付たが、でかくでかしたではないか。

西澤一鳳は、江戸の言葉は方々の寄せ集めみたいなものであるから、本當に江戸にもとからあつた言葉は甚だ少い、江戸の言葉といふものは關八州の言葉を取合せたもので、それを江戸言葉と云つて居るのだが、大體から云へば京大坂の言葉を詰めて短く云つてゐるやうに思ふ、それに略言が多い、例へば大坂で『日本橋』といふのを、江戸では『日本橋』、『氣障』といふべきものを『氣障』、『桐油』を『トユ』といふ風になる、鍛冶も火事も皆『カ』で、『クワ』とは云はない、醫者と石屋との區別がよくわからない、河岸であるべきものを河岸といふ、といったやうな詰め方をする、略する方では『ぶら提灯』を、『ぶら』で済すやうなのがある、と云つて指摘してゐる。又神澤其蝸などは訛の例として、『俳諧』といふべきを、『へエ、ケエ』といふ、これは開口が悪いからで、『借りてくる』と『買つてくる』とが、ごつちやになつてゐるといつて指摘して居ります。そこで古いところの江戸語の状況を、少し探つて見たいと思ふ。言葉のまゝ、

に書き残されたものはまことに少いが、幸に咄本は文語よりも口語の方が多く書いてある。『鹿の巻筆』は貞享三年の江戸版で、名高い鹿野武左衛門の話を集めたものでありますが、その中に假名書にした看板を讀違へる話がある。『とうゆがつば』と書いてあるのを、『とうゆが、つば』と讀んだ。それで鐔の事だと思つた間違を、笑話に仕立てたものであります。この武左衛門は江戸の人ではない、大坂の人だつたやうですが、これで江戸の人に通じて笑はれもしなかつた。短い話ですから、そのまゝ出して置ませう。

彌左衛門町に明石屋又介とて、そゝうなるものあり、御出入の御やしきへゆくとして、道にて看板をみて、はなし申けるは、さて〜此頃かわりたるつばの出申候が、殿様には鐔なきなされますに、いまだ御覽なされぬかと云、此頃はやる正阿彌手の事かと仰ければ、いやとうゆがつばと申て専らはやります、方々に看板いでましたといふ、是はめずらしき物じやと

て、御用人をよびつけ、又介同道して鰐を見てまいれと仰付らるゝ、かしこまり候と打連れて往きて見れば、とうゆがつかはの看板なり、用人もあきれてかへられた。

それから『新話笑眉』、これは作者は知れませんが、正徳二年の江戸版です。

この本の中には、初の方に『さかい』などといふ大坂獨得の言葉が入つて居りますが、先づ一番江戸らしい口氣で書いたところを一つ出して置く。

やい／＼こちの五兵衛は内にをるか、けふは頭痛がいたしますとて、二階にふせりております、はて不思議な事かなと云ながら、五兵衛が側に行、やい／＼とてゆりおこし、先ほど糞町をとほれば、倒れ者有て、大勢あつまり見る程に、我も立寄て貌を見れば其方也、南無三寶これはしたり、先宿へ歸り詮議せんと思ひ、大息ついてかけ歸りたりと語れば、五兵衛聞て、むくとおき、挨拶なしに駆出、片時が間に糞町へ行倒者を見て歸り、旦那

様御氣づかひなされますな、私ではござりませぬ。

これで見ても、如何にも語勢の緩い、上方らしいものです。『下手談義』は豊後節が上方言葉を江戸へ持込んでゐる、と云つて叱つてゐますが、それより前に脚本や上方芝居、乃至女形の臺詞によつて、上方風の言葉が随分江戸に運ばれて居ります。又それよりも早くから、俳諧の本、雑俳の本。——此等は撰者も一緒にありますし、集も一冊であつて、上方も關東も一緒になつて居りましたから、さういふ方面は江戸語も上方語もごつちやで、随分混亂してゐるやうに見える。それを小言を云つた者は無い。蜀山人は、並木五瓶が江戸へ來て、江戸の言葉を脚本に書込んだ、その言葉が上方臭いもので、江戸には通用しないと云つてひどく腹を立てゝゐる。さういふものを見たり、また三馬が『大千世界樂屋探』の中で、源平盛衰記の本文を持出して、敦盛は平家の上臈、都人なればといつて、直實は武州熊谷出生だからといつて、兩者の言葉を、上方言葉と關

東言葉とで対照させてゐるのを見たりすると、それはひどく上方言葉を嫌つてゐるのみならず、江戸近在の言葉である『べい〜言葉』も嫌つてゐる。『べい〜』が、江戸の真中でも用ゐられたことのあるのは云はないで、田舎臭いとして馬鹿にしてゐる様子がよく知れる。そんなにも江戸の言葉に對する詮義立がひどくなつて、寶曆以來漸くきまりかけた江戸語といふものが、ひどく結構なものゝやうになつて大事にされてゐる。それが又江戸の誇でもあるやうに取扱はれてゐる。成程、寶曆以後江戸の言葉の變り方といふものは随分烈しいので殊に文化度となり、天保となつては益々その變り方が烈しくなる。詰ることも益々甚しくなり、訛ることも益々甚しくなる。中本には江戸語をよく寫したのが澤山あります。

中本の寫した江戸詞

三馬が文化七年に出した『早變胸機關』の中の文句を一つと、天保四年に瀧亭鯉丈の書いた『人間萬事虛誕計』の中の文句を一つ出して置く。

ハテわつちも、おめさん方にさ、ネ、ボクな野郎だともられるもお恥かしいからネ、筋道のわからねへ、どちぐぢなことは申しやせん、ネ、ようござへすか、あの男は額へ釘ぬきをあてるに似合はねへス、ネ、食れへ酔て、しだらもねへ事をいふとか、何とか、ネ、ハテサ、分りきつて居りやさアな、ようござへやすか、ネ、といふもんだからもし、ハテ、誰しかも、だりむくつたあげくにやア、酔のこんにやくの、ネ、あへたは、もんだはが、ありたがるもんでござやさア、其處どころでござやすから、これがおめさんの前でござやすが、ハテもとをらねへことをいつたつても、始まらねへはなし合だから、ぐつとひつちめた高がかうでござへやさアな。(早變胸機關) いやだ〜、はなせ〜、とめるやつは相手だぞ、わるくとめるとくらひ

つくぞ、べらんめエ、あんな野郎にこめられては、男がたゝねえ、死んで仕舞ふく、おれが死ぬからにやア、あいつを殺しておいて死ぬぞ、ヤイ野郎、サア死ツくらだぞ、エ、留吉放せといふに、コレヤイ頼母しくねえナゼ庖丁をとる、ナニあぶねえ、べらんめエ、ふだんこそ刃物はあぶなからうが、人を殺しておれが死ぬに、あぶねえ事があるものか、いやだくなんでも殺してしまはねえちやア、つらがたゝねえ、だれがいふことも聞ねえ、いやだくいやだく。(人間萬事虚誕計)

これと前の方の笑話本と照合して見ると、實にびつくりするほど違つた味ひがある。言葉の形も變つてゐるが、その味ひに於て益々甚しいものがあります。それが決していゝ言葉だとは更に思はれない。よくつても悪くつても、それが江戸の言葉として、江戸の言葉だからそれがいゝんだといふ心持で、皆が遣つてゐるやうに思はれる。そんな風に眺めて參りますと、江戸の自慢になると

いふやうなものは何であつたか、よくわからないうやうな氣がする。わからなくつてもそれがいゝのだ、といつたやうな心持のあるところが、いゝのかも知れない。

大御所様時代

さういつてゐるうちに天保改革以後、江戸といふものはだんく老衰期に入つて來た。

一古き文ども見し夜の夢に、延寶天和あたりの花見にもあるべし、能衣きたる男女花有木より木へ細き紐杯引はり、おもひくの衣をうち懸、幕の如くなし、酒酌唄ひ舞さどめく、折から雨降出るに、皆我おとらじと衣うちかぶり、濡ながらに家路に戻るさま、かの古き繪にて見るがごとくに覺たり、ア、當世四民一統の困窮、能き衣きる事停止あれども、夫もいらぬ事

か、著よと仰有とも世間不融通なれば、並くの衣さへ求易からず、夏月の夕涼ミには高尾川一を始名だたる船ども大川に浮べ、其餘の小舟も出し切て、遅く来る客は舟なきを悔みたるも、わづかはたとせ前の事なりし、今は彼川一丸もよし町の橋下に朽廢れ、三伏の暑き日にも船宿の見世先に若い者將基さし居るも恨みなれ、秋八月中の五日は八幡の祭禮とて、殊に賑しきは深川八幡の蔭祭とて御宮へ詣で、歸るさは梅本尾花屋山本が樓に遊び、または小舟に棹さして向地の七草にめを悦し、大七平岩が料理に飽き、萩寺のはぎに、暮ては柳嶋の杜若の別莊か、寺嶋の松の隱居梅幸の別莊也にむしを聞など、おもひくの工風あるべきを、今は其場所もなく、十月十七日は芝居役者のよりぞめ、廿日は紋看板揚げ、茶屋くのかざり物、三座新役者附配り出し、續て役割り出し、晦日は茶屋くの賑ひ、客よりの積物に入口を失ひ、鴨雜煮にはらをふくらす下戸あれば、夫をわらふ

上戸は江戸藝者相手に盃を飛ばす、霜月朔日は三座一度に新狂言をはじめ、草履をはきて舞臺を踏客は金銀を遣ふたるし、幕間イに役者の棧敷へくるをよろこび、川通り其外最良よりの送り幕水引ハ所せき迄張かさね、狂言終るを待て、茶屋の二階へ昇天すれば、役者藝者の缺のぼり、打交りてのぞめきは、みな金銀を湯水のごとく遣ふ印、戻りハ紋付たる軒挑灯をゆゑなり持、茶屋の男女送り出、別れは大地に頭をつく、是皆世間の融通よき故也、今は役者の寄ぞめ、其餘の式もなく、積物する客なければ、茶屋が持出しにて酒の明樽など積ならべ、かざる人形とてもおかしげなるさま、霜月に至りても役者は何れの座へ身を寄るや是をしらず、役者附もなく、時ならぬ櫓下判附を配るをみるに、秋狂言にもあるべく、天神記忠臣藏仙臺萩など時に逢ぬ事と不審すれば、茶屋の男女如才なく、顔見世は來はるいたし升と言も夫なり、春に成りても音沙汰なし、其なきを物入なしと客よろこ

ぶ、かゝる不景氣に隨ひ、役者も劣りて、わが幼年の頃文見たる澤村宗十郎
 瀬川仙女おなじく田之助岩井半四郎松本幸四郎坂東彦三郎同三津五郎中
 村歌右衛門助高屋高助尾上松録やうの者は皆世をさりて、尾上菊五郎市川
 團十郎岩井三郎など一時流行なりしが、夫も世を去り、當時は顔さへよ
 ければ婦女子のもてはやし、藝の事など譽る者更になく、金銀をめぐまざ
 れば別荘もつべき力なく、猿若町の長屋住こそ神の助成りとおもひ居るも
 哀なり、師走大津ごもりにも往來の淋敷は、世間の人、借金仕たくも貸す
 者なきゆへ、自然人足の薄きも道理なり、予も生涯文化度のにぎはひ今
 一度見たし。(眞佐喜のかつら)

この文は二十年前を回顧して、如何にもそれが惜しい過去であつたことを現
 してゐる。これは明治の初になつても懐かしがつて居りました大御所様の時代
 江戸の黄金時代であつたやうに思はれてゐた時の事で、その時は前にも云つた

やうに、水野出羽守の貨幣改鑄で世間の様子が違つて來た。例の通り通貨膨脹
 といふ事からの景氣だつたのであります。それが天保の改革で役者どもの贅澤
 が止み、芝居町のさびれが目立つて來た。それが何故特別に悲しいやうに感ぜ
 られるか。芝居町が寂しいといふことは世間の景氣の知れることで、何故世間
 の景氣が芝居町で知れるかといふと、江戸と芝居町とは前にも云つたやうに、
 いろ／＼な係り合があるからなので、これは江戸以外のところの芝居町の關係
 とは違つたものであります。無論外のところでも、世間の景氣が盛り場で知れ
 るといふのは當然の事ですが、江戸は別な關係を持つてゐただけに、別なもの
 を見せましたのです。芝居町がさびれたといふことは、世間の方から見ていふ
 のだし、前に久須美佐渡守が初鯉を食はないのを見て、江戸が年取つたといつ
 て嘆息したのは、個人の上から見て云つたのである。さういふやうに芝居町の
 衰へを見なければならぬと思ひます。

さてそれから後、嘉永年間になりまして、例の黒船が来た。これで人心が非常な動搖を感じた。それに次いで安政の地震がありました。安政の地震後は、武家屋敷の規模といふものが、すべて三分一と思ふほどに縮まつた。元來が武士を御得意にしてゐる江戸市中でありますから、武家屋敷の縮小といふものは大變な影響を受けるわけである。さうして又安政地震の時から、強盜があり、強姦があり、地震の擧句は一時警察が怪しくなつた。その引續から文久になつて、浪人の騒ぎが烈しくなつて參りますと、江戸は殆ど無警察の狀況に陥つた。さうなると江戸ツ子などといふものは何處へどう飛んで行つたか、わけのわからないやうになつてしまつた。

貯金は誰がする

尤も江戸には所謂江戸ツ子の外に、江戸ツ子と云はない江戸ツ子がゐた。そ

れは御家人です。御家人は自分の受取るきまつた俸祿では行立つものでないから、家計の多くは内職によつて支持されて居りました。この内職の關係から、職人とも附合ふし、職人と同様な工合になつて來てもゐます。御家人にも二種あるのですが、内職をして律義にやつてゐる方の御家人は、なるべく錢を遣はないやうにして、その日々の暮し向も勘定をきめてやつてゐる。又諸大名の家來にも定府の者と勤番の者とありまして、定府の者はやはり幕府の御家人と同様、暮しの方に追はれるので、子供の時から内職でもおぼえて、それを小遣にする。少し稼ぎ慣れて來て、錢が餘計取れるやうになれば、それで放蕩をするのが江戸前だと思ふ者が多くなつて來る。勤番の者は國から出て來るので、江戸の勝手をちつとも知らない。定府の者はそれを田舎者だといつてこづき廻す。さうすると田舎者も負けない氣になつて、己も通人にならうと心がけるやうになる。定府の者はいゝ幸にして、それを泳がせる算段をして、何でもコ

ケにするのを江戸前のやうに思つてゐる。遂にそれを引張り込んで、放蕩仲間に入れる。江戸の者は元來が手詰つてゐるんだから、もう金銭が自由に廻るやうな工合の者はゐない。それが爲に自分の身を果すやうなことは無いが、勤番に出て来たものは、それと違つて幾分か餘裕があるし、貢いでくれる者もあるから、却つて首の廻らないことになつたり、屋敷の方が不首尾になつてしくじつたりしてしまふ。だから武士の低い階級の者は、錢を遣はないのを江戸慣れたとしてゐた風がある。根氣のいゝやつになると、いくらか貯金なんぞをするやつがあつた。江戸の者から云へば、『江戸ツ子の生れぞくない金をため』といふわけで、後家婆か三びん士の外には、貯金なんぞするやつは無いとしてゐた。勿論商人などは金を溜めるなんていふのではない、儲けなくつちや駄目なのだから、貯金したいなんていふことは思はない。職人などになるとさうでない筈だが、稼ぎさへすれば金になる。腕から金が出る、夜が明ければ勞銀

が取れる。といふのは大風があつても、大火事があつても、さういふ事があれば賃銀が三倍にも五倍にもなる。浮いた金が入つて来る。それに浮されて、今日はくで日を送る。それがいつまでも續くやうに思つてゐる。いつでも錢が取れると思ふから、なまけ者なんていふものも出来て来る。又案外に時々金の儲かることがある爲に、彼等には勤儉貯蓄といふことが無い。油断してゐて困るかと思ふと、又案外に金が入る。その調子に浮れて、うか／＼として遣つてしまふ。金銭に綺麗であるとか、流れ川で尻を洗つたやうだとかいふことは、さうした欲から超然としてゐたのではない、たゞうか／＼としてゐたのである。それですから理窟をつけて江戸ツ子を考へて見ようとすると、どうも徹底した見方が出来ないやうにばかりなつて行く。けれども何程江戸ツ子が浮れてゐても、そんなことには貪著がない、經濟事情はそれを打棄つては置かない。江戸ツ子は當然なるべきやうに已になつてゐて、明治の初には直ぐ本所深川の

方へ行つて、追ひ込められたやうになつてしまつたが、さてその後は全くわけのわからないものになつてしまひました。

一體經濟といふものは、貨幣の動きのみで考へるものでもあるまいし、生産分配、餘剰といふやうな事だけで済むものでもありませんまい。今日の政治學といふものは、法律中心、若しくは所謂經濟財政を根據としてやつてゐるやうに思ふ。今日經濟といふのは財理のことであるが、眞の經濟はさういふものではない。安民長人といつて、民を安んじ人を長ずるといふことが、經濟の本當の作用でなければならぬ。政治も亦法律と財理だけのものでは決してない筈です。江戸ツ子の成行を説かうとして、端なくもこんな問題に觸れることになつたが、今日の所謂經濟史家のいふことが、世間の大體の心持と出合つてゐるからといつても、そればかりに従つて見るといふことは、大に考へて見なければならぬと思ひます。

私にしては江戸ツ子といふものは、容易に説明の出来ないものであつて、何彼と云ひ試みれば只だゴタ／＼と混雜ばかりして、取止りが無いやうにばかりなつて往く、さては矛盾もあらう、撞着もあらう、若しも上手な讀者が筋を拾つて、言外の微旨に徹して下ださるならば、何程の喜びであらうか。

江戸ツ子の話 尾

貯金は誰がする

昭和八年四月十三日印刷
昭和八年四月十五日發行

江戸ツ子

定價壹圓八拾錢

著者 三田村玄龍

不許
複製
世曠
齊歡

發行者 武田尾吉
東京市淀橋區戸塚町一丁目五八番地

印刷者 五十嵐良晃
東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京早稻田大學出版部
振替口座 東京 壹壹貳參番

著 魚 鳶 村 田 三

頁〇〇五約卷各
入 數 多 畫 挿
本 美 幀 裝 雅 高

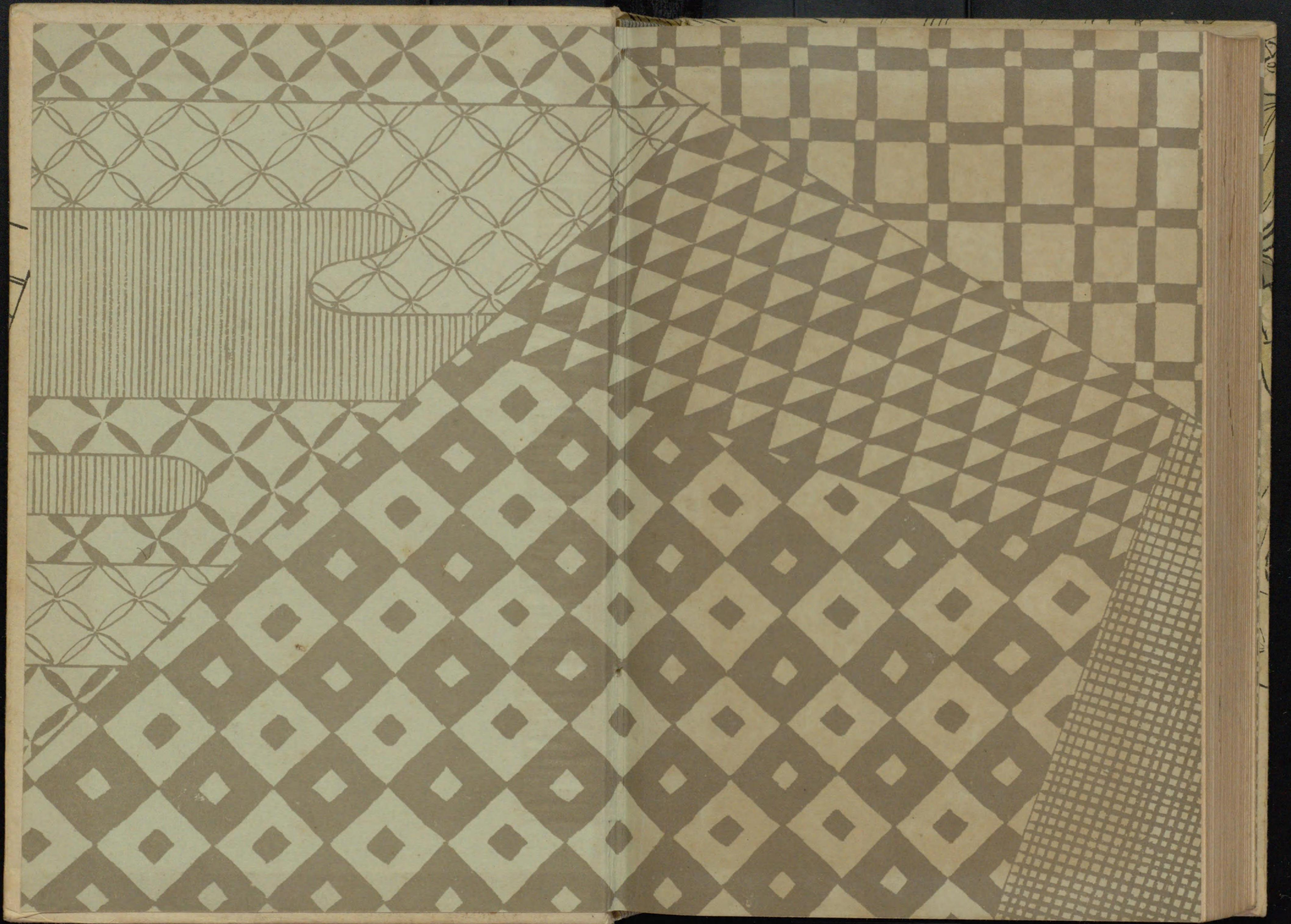
書 叢 戶 江

お 家 騒 動 の 話	捕 物 の 話	江 戸 の 花 街	江 戸 の 泥 坊	江 戸 ツ 子
續 刊	續 刊	近 刊	近 刊	四六判四九〇頁 定價壹圓八拾錢 郵 稅 十 錢

五 四 三 込 午 話 電
三 二 一 一 京 東 替 振

行 發 部 版 出 學 大 田 稻 早

京 東
田 稻 早



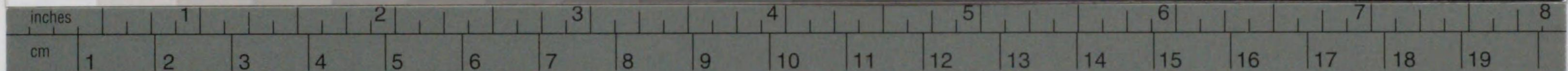


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

